日本語教育実践研究（12）
—自己調整能力を育成する文章表現教育—

宮崎　里司

実践研究（12）の下で行われている文章表現８Ｃは、大学場面で必要とされる文章表現能力の習得を主な目的としています。授業では、文章産出過程で現れる問題を意識化させながら、問題解決能力を育成し、その上で、意見文、説明文、論説文などの構成や表現などを確認した上で、それぞれのレポートや研究計画書が達成できる能力を習得させることを目標とします。さらに、大学院日本語教育研究科の実習生とのペアやグループ活動を通して、アカデミック・ライティングについて意識化させ、自らの文章表現能力に関する問題解決能力、つまり自己調整能力を育成していきます。

このクラスでは、文章を作成するために、学習ストラテジーと推敲という、２種類の管理能力に注目しています。文章を作成する際には、自らの文章作成の過程を意識化し、それを客観的に評価するといった、メタ認知ストラテジー（またはモニター）の活用が不可欠です。構想段階で、選択したトピックやテーマについて、他の参加者とのインターアクションを通し、書く内容を検討します。さらに、見直しの段階でも、同様なインターアクションを経て、自己の文章を磨きます。こうした他者とのインターアクションによる文章管理を、第一のモニターとします。次に、文章作成の過程で生じた問題についての推敲作業を、第二の自己モニターによる問題解決と捉えます。このように、２つの異なる言語管理のモニタリングを行い、他者の評価や意見、自身の文章表現と向き合い、今以上に能力を高めていくことを目指します。

さらに、２００６年度後期から、「気づきメモ」という活動も導入しています。これは、学習者の自律性を高めるために、自らの学習を意識化し、学習方法に対する興味や意識などについて書く作業です。メモは、クラスに参加している日研生から、フィードバックをもらうこともあります。気づきメモは、学習の改善をはかるばかりでなく、自律学習への意識づけをし、学習態度や意欲の向上にもつながります。

来年度以降、別科の文章表現クラスは、新たに「文章プロジェクト」として始動します。文章能力の習得に特化しがちであった、これまでのクラスデザインを、口頭表現をはじめとした他の表現との統合を目指す意義を、学習者に理解させ、かつ自律的に学習させるよう、さらに工夫を重ねる必要があります。

（ミヤザキ　サトシ・日本語教育研究科教授）